

# タイトル 政策としてのシビックプライドについての考察

渡部薫（熊本大学）

Keyword : 心理現象、地域づくり、コミュニケーション・メディア、地域アイデンティティ、地域の（固有）価値

## 【問題・目的・背景】

### ○問題・背景

- ・近年、シビックプライドが地域づくりの一手法として活用されるようになってきている。これは、もともと英国の19世紀に現れた当時の市民たちの、都市を自分たちが支えているという自負を表したものであるが、最近の英国の都市再生政策の流れの中で英国政府がこの概念を取り上げたことから注目されるようになった。
- ・国内においてもこの概念をシティプロモーションや地域づくりに結びつけてその推進手段として活用するようになってきている。
- ・しかし、基本的に該当都市あるいは地域の人々がその都市／地域に対して持つ感情であることから、これを政策的に活用することを改めて問う必要がある。

### ○目的：シビックプライドの地域づくりへの可能性と問題点についての検討

- ・この研究では、概念的検討を主目的として、国内の研究では地域づくりに関連づけた計画的／政策的なシビックプライドがそのあり方について論じられることなく推進されているためそれに対して疑義を呈し、捉え直し・位置づけ直しを行い、その上で計画的／政策的なもの、すなわち、地域づくりを推進する手段としてのシビックプライドの可能性を論じ、議論・研究上の課題も提示する。

## 【研究方法】

- ・基本的には概念的検討を主として、地域づくりの方法としてのシビックプライドの問題点と可能性について先行研究を踏まえて検討した上で、検討内容について事例によって検証・確認する。

## 【研究内容及び分析結果】

### ○取り組みの現状

- ・英国では2000年頃、労働党のブレア政権時代に地域に対する市民の参加意識を高揚させ都市再生の機運を高めるために言及、これより注目が集まるようになる。
- ・国内では、シティ・プロモーションの手段として活用されており、そこでは地域に人を呼び込むことを目的としており、次のように整理できる。

- 自治体が都市間競争を戦うためのシティプロモーションのための道具として活用
- 広告代理店が積極的に自治体に売り込み
- 地域についてのポジティブな部分のみを政策的に選別する傾向が強い

### ○研究の現状

- ・国内の研究動向について、必ずしも研究とまでは言えないものも含めて整理すると大別して次のようになる。
    - シビックプライド醸成方法、源泉・要因
    - シビックプライドを使った地域づくり
- この2つのタイプの研究が多くを占めている。まだ研究上初期的段階にあるにもかかわらず概念についての検討は十分ではないが、先行してその活用についての研究が展開されている。

### ・Collins (2017, 2019) による批判的議論

- \*シビックプライドにはしばしば政治的視点が介在する可能性がある、さらにいえば、政策的意図によって利用されていること——現在の英国においては都市再生を推進するソフトなツールとして位置づけられている——に対して認識することが重要である。\*そこでは、シビックプライドによってポジティブな感情を強調することによって地域おけるネガティブな部分や問題を隠す、あるいは市民の目をそらす傾向がある。シビックプライドを論ずるにおいては、対象となる地域のネガティブな側面も含んだ多面的な議論が必要である。

- \*また、シビックプライドを単に自治体の政策に関わる問題としてだけではなく、その都市における広義の統一感や集合的責任感を表すものと捉えようとする理想論的議論もある。しかし、そのシビックプライドが抱えるあるイメージが他の人たちの持つものと食い違ふとき、衝突あるいは分裂が生じる可能性もある。

- \*とにかく政治的あるいは政策的に活用される以前の問題として、シビックプライドはあくまで市民が持つ感情として捉える必要がある。

### ○概念的検討

- ・概念は、実は、十分に議論されていない
- \*Collins によると英国でも同様に十分に検討されないままに使われている。

\*Civicの意義を重視すると、対象となる地域に関わる市民としての自覚と責任感に支えられた、地域に対する誇りと定義することができる

\*もともとは、19世紀の英国ヴィクトリア朝時代に現れた概念と言われている。産業化の進展とともに都市が急速に発展し次々と建造物が作られ都市の物理的環境が形成される中で、市民階級が持っていた自分たちが都市を形作っているという自負に基づいていたと言われる。

\*このシビック性から、地域づくりに市民参加を促進するためのメディアとして利用されることになる

・基本的には感情の一種であるが、政策的な意味を持つものとして捉えられる

\*Collinsは感情としての理解を持つことの重要性を強調する。感情は中立的な空間に住むための意味のある場所に変えるプロセスや構造を形成するもの、あるいは対応して起きるものであり、我々は何か、どのように生活するかを形作り、彩りを与える。場所は感情の投資や結びつきによって形成そして構成されるのである。

\*Collinsによるとプライドとは定義上複雑さを持つ感情である。一種の自尊心であり自分のアイデンティティや社会的な関係を評価し讃える感情にもかかわっている。

\*また、プライドは感情であるとともに倫理的価値をも表しており、人が何を思いやる、大切に思うか、あるいは、何を目指そうとするか (aspiration) にかかわっている。そこから、強いプライドの感情を持つ人たちは、彼らが価値を置き、責任感を感じるものを思いやり、愛し、保護する行動に踏み出す傾向を持っており、それによって自分たちのプライドを強化することになる。

\*このような個人の感情としてのプライドから、シビックプライドに対する、人々の自分たちの場所や地域社会に対する帰属感や強い絆の感覚、という理解が生まれると考えられる。

・関連する概念である地域アイデンティティ、地域の(固有)価値との関係について検討する必要がある

\*地域アイデンティティ:簡潔に定義すると、地域の人々によるその地域に対する自己認知による、地域の持つ固有性に基づく地域の自己確定となる

アイデンティティとは、自己についての一貫性を持った意味の体系のことであり、自己の存在の固有性についての意味付けである。自己における統合性と一貫性及び他者との関係における自己確定により成り立っている。地域アイデンティティは、地域の主体性の基礎となるものであるため、これが確立されることで地

域づくりが大きく支えられることになる。しかし、個人のアイデンティティが安定したものではなく、不断の努力によって自分が何であるかを確定しようとしているように、地域アイデンティティも、地域を取り巻く環境の変転する状況下におかれて、必然的に不断の再構築を目指した運動を伴う。

シビックプライドとの関係については、このような地域に対する感情あるいは価値は、当然地域が何かという認識に支えられており、したがって地域アイデンティティはその基礎となると考えられる。

\*地域の(固有)価値

地域アイデンティティの検討でも触れたように、地域の固有性、(固有の)価値は地域アイデンティティを基礎付けるものであり、それゆえにシビックプライドをも基礎づけることになる。

\*地域の(固有)価値、地域アイデンティティとシビックプライドの関係

基本的には、地域の(固有)価値がベースとなって次の関係が見られる。

地域の(固有)価値→地域アイデンティティ→シビックプライド

その点において、地域の(固有)価値はシビックプライドの源泉ということができる。ただし、次に論ずるシビックプライドを手段として用いる地域づくりにおいては、必ずしもこのような図式にはなっていない。

○地域づくりの方法としてのシビックプライド

・地域における公共圏構築に市民参加を促進するために有効な方法である。

\*地域づくりにおける心理的作用に着目したツールとしての機能を持つ。基本的には、地域におけるコミュニケーションのメディアであり、これを通じて地域づくりを促進する。

\*市民に新たなコミュニケーションを開き、あるいはポジティブな心理現象を生み出すことによって彼らの地域づくりやコミュニティ活動への参加を促し、活動を促進することになる。次のような作用をもたらすことが考えられる。

-地域への関心の喚起

-能動的参加の促進

-学習過程として作用

\*具体的にはシビックプライドの醸成を目的とする活動を通じて地域の人々を地域づくりに参加させようとする。そこでは、地域の価値を発見する、あるいは創造す

ることが重要となる。価値の創造は、人の行動を動機づけ、同じ目的の人たちの中で協力・協働関係を形成する。これについては文化資源論では次のように説明する。

\*文化資源論では、潜在的資源が顕在化される、すなわち資源化される時そこに人々の関与が生じ、その中で人々の間に協力関係が生まれる可能性があるとする。そこでは、資源化を一種の価値の創造として捉えている。価値の創造という目的が人々の関与をもたらす、これを実現するための活動を生み出す。このような参加者、関係者が価値の創造という目的を実現するために、彼らの間に相互作用が生まれ、その中から連携・協力関係が形成されていく。

・その一方で行政による政策的誘導

\*エンドとしては自治体のシティ・プロモーションであり、地域の魅力を作り出すために地域住民に参加して活動してもらうための手段として活用しているため政策的な誘導を伴うと言わざるを得ない。

\*もしこのような市民による活動が、より自律性が発揮されるならば、その学習過程を通じて必ずしも地域に対するポジティブな評価ばかり生まれるとは限らない。地域に対する感情がプライドとして明確化される前に、地域の問題への関心の喚起や過去についての反省が強く出てくる可能性も考えられる。

・地域の価値、地域アイデンティティとの関係、再考

\*シビックプライドを手段とする地域づくり活動においては、上述した図式とは逆に、シビックプライド醸成を目指した活動が、地域の(固有)価値の発掘・顕在化(いわゆる資源化)の動きを伴い、地域アイデンティティもそれに伴って再構築が展開する。

\*地域の価値を創造することになり(このような活動自体も魅力としての可能性を持つ)、地域の魅力を向上させることになる。

\*このような場合、地域アイデンティティが明確になる前にシビックプライドは登場することになる。地域アイデンティティ自体が固定的なものではなく不断の再構築を伴うため、特に異例のことではないかもしれない。運動論として考察した場合、ここから議論が起こる等、地域アイデンティティが覚醒化され、そこからコンセンサスの得られる地域アイデンティティが生まれる状況を導くと考えることもできる。

\*しかし、このような活動が政策的に誘導されている場合、政策的に地域アイデンティティを創り出してしまうという可能性もある。また、このような運動によって地

域に対する評価、そして地域の人々の自己認識に関わる(地域の固有価値に根拠を持つ)地域アイデンティティを一部の人たちの短期的な活動を通じて一方的に形成する可能性も考えられる。

\*シビックプライド 推進者が論ずるように、シビックプライドの活用が市民を公共圏への参加に導くことに有効だとした場合、そのような公共圏が一部の人たちの活動にもつづら基づいて形成されるのであれば、それは公共圏としての意義に疑問を生むことになる。

・プロセスのあり方の重要性

\*以上のような考察からは、シビックプライドは地域づくりにおける市民参加の手法として人の心理的側面に働きかけることで活動を促進する有効な方法と評価することができるが、政策的介入を伴う場合、政策によって市民の心理的側面が管理される問題や地域アイデンティティへの影響のようにその活動にとどまらない影響の問題が生じる可能性が指摘できる。そのため、具体的にどのような方法を取り、どのようなプロセスで運営されるのかについて、慎重に検討する必要がある。

○政策的経験からの示唆

・英国の文化政策の経験

\*ここで文化政策を取り上げるのは、文化政策がそれに込められた意味を提示する行為としての側面を持っており、その点においてシビックプライドを手段とする地域づくりにおいてもシビックプライドを醸成することを通じて地域の意味を形成することにおいて共通するからである。

\*英国のグラスゴー(1990年のヨーロッパ文化首都)とニューカッスル・ゲーツヘッドの文化政策(2000年代)を取り上げるが、2つともその提示した意味をめぐって議論が起きている。

\*グラスゴーにおいては、文化都市というグラスゴーの地域イメージや文化政策のあり方に対して、グラスゴーを本来代表する労働者階級の意思が反映されていない、グラスゴーの過去の歴史が顧みられていない等の批判の声が上がり、広範な議論が巻き起こっている。ニューカッスル・ゲーツヘッドにおいても、自分たちは疎外されているという声が聞かれている。

\*これについて、ミドルストーンらは、文化政策の方向性に関しては市民の承認や参加が必要であり、これがないままに政策を展開していけば地域社会内部の不協和音が増大し、短期的には経済的に成功したとしても長期的な持続可能性を損なうことになるのではないかと論

じている (Middlestone and Freestone 2008)。

\*文化政策に広く市民の声を反映させるべきではないかという問題は難しい問題である。ズーキンは、「一つのグループにとっての文化は、他のグループにとっては抑圧になるかもしれない」(Zukin 1995: pp.293-4) と論じているが、文化は意味に読み替えることができる。

#### ・国内のアートプロジェクトの経験

\*アートプロジェクトも地域のコミュニケーション・ツールとしての役割を担っている。

\*アートプロジェクトの基本的特性としてサイト・スペシフィックが挙げられるが、アートプロジェクトが地域性、あるいは対象となり場所の持つ固有の特性を尊重し、それをプロジェクトに組み込む、あるいは反映するような形で展開することを意味する。そのため地域とのコミュニケーションを重視し、それを通じて地域の歴史や文化、生活に触れ、価値の発掘を図ろうとする。しかし、必ずしもポジティブな部分にばかり光をあてるのではなく、負の歴史や地域の問題、政治的問題まで対象とする。地域の様々な側面を取り上げることによって地域の人々と地域のことを改めて考えようとするのである。

\*一つの事例として、別府のアートプロジェクト・別府現代芸術フェスティバル「混浴温泉世界」(2009, 2012, 2015 年開催) では、導入された現代アートは、別府の歴史や文化、とりわけ温泉文化に光を当て、別府の地域の文化の価値を市民に再認識させることになった。現代アートは、現在の場所と時間を重視しつつも、それがどのように形成されたかにも目を向け、それらに向き合っ何が見えるのか、それをどう表現するのかを問うアプローチをもっており、それによって別府の現在を生活している人たちの生活や取り巻く環境を解釈しようとしたのである。そうすることで別府の温泉文化が抱えていた性風俗やそれにまつわる歴史までも明らかにし別府の文化に対する多面的な考察を試みたのである。

・英国の文化政策の経験からは、地域における意味を形成・表現しようとする活動においては、市民の広範な参加がなく一部の意思が代表される場合、他者が支持する意味と衝突あるいは排除する可能性があることが示唆され、また、国内のアートプロジェクトの経験からは、地域にとって意義のある意味を表現しようとする場合、特定の偏向を避けて地域に向き合うことの重要性が示唆される。

#### 【今後の展開：調査計画】

・以上の議論に基づき、事例調査を行う。事例としては北

上市と水俣市の2つを取り上げる。

・北上市では、まち育てという考え方で自立したコミュニティを育てるという目的でシビックプライドを活用した地域づくりを行なっているが、シティプロモーション戦略の一環でもある。

・それに対して水俣市は、水俣病という負の歴史と格闘しながらこの問題を正面から取り組むことで環境首都としての評価を獲得している。必ずしもシビックプライドを意識した活動は行っていないが、かえってそのような負の遺産をはらんだ都市の歴史を認識し、その上に立って新しい都市の姿を建設しようとする姿勢に Collins がプライドの要素として指摘する aspiration を見ることができるのである。

・北上市については、そこでは具体的にどのような方法・プロセスでまち育てという地域づくりを行なっているのか、そこでは地域アイデンティティへの影響をどう見ているのか、参加した市民はどのような自覚を持って参加しているのか、その地域アイデンティティやシビックプライドはプロセスの中でどう変化したか等について調査する。

・水俣市については、歴史的な地域再生の経過を踏まえながら、環境首都の取り組みに焦点を当て、これに関わった人たちを中心に水俣という地域に対してどのようなアイデンティティやプライドを持っているか、環境首都というイメージに対してどのように意味を受取っているか、取り組みの経過の中でどう変わったかについて調査する。

#### 【引用・参考文献】

- ・伊藤香織・紫牟田伸子監修, シビックプライド研究会編, 2008, 『シビックプライド—都市のコミュニケーションをデザインする』, 宣伝会議
- ・伊藤香織・紫牟田伸子監修, シビックプライド研究会編, 2015, 『シビックプライド2【国内編】—都市と市民のかかわりをデザインする』, 宣伝会議
- ・牧瀬稔, 2019, 「日本における『シビックプライド』の動向整理」, 公共政策志林, 7 巻, pp.13-26
- ・渡部薫, 2019, 『文化政策と地域づくり—英国と日本の事例から—』, 日本経済評論社
- ・Collins, T., 2016, 'Urban civic pride and the new localism', *Transactions of the British Geographer*, 41 (2), pp.175-86
- ・Collins, T., 2019, 'Towards a more emotional geography of civic pride: a view from an English city', *Social & Cultural Geography*, vol.20 (3), pp.387-406